

木村文助研究

通信 23号 2011・5・6

合唱劇協賛文保研展示会

『綴り方指導者木村文助の業績』

二〇一一年二月一日（火）～七日（月） 九時～一七時
北斗市総合文化センター

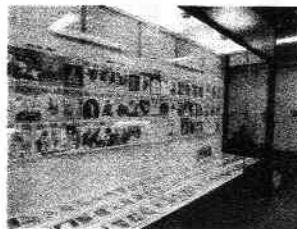
『赤い鳥』本、写真など

約三百点展示三七二人の

参観

地元の児童が書いた綴り方が「赤い鳥」復刻版一九五冊、文助の編著書、写真等を展示し、参観者は熱心に目を向けた。文助の教え子である平中忠信さん（数年まえ講演していた方）も札幌から駆けつけた。会場にはかつてラジオ放送された音声を流した。

北斗市教育委員会の協力、作業・当番に当たった会員らに感謝である。皆さんのお蔭で成功裏に終了した。



♪合唱劇「村に咲く花」に千人

|| 百人の熱演 ||

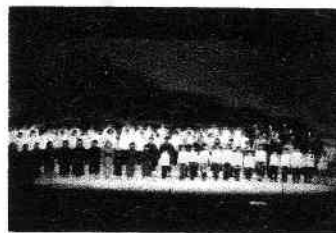
二月六日 北斗市総合文化センター

「木村文助先生と子供たちの綴り方」を盛り込んだ「村に咲く花」合唱劇が、地元合唱団員、新たに加わった人、児童・生徒ら約百人が参加して開かれた。

当日の会場は見る見るうちに満席の千人を超えた。舞台では、綴り方が合唱となり、初の赤い鳥入選で歓喜、木村先生と子どもとの会話、「抗議」の親達とのやり取り、次々と読まれる綴り方・二時間の構成、演技が素晴らしく感動を呼んだ。平中さんは、帰宅後新聞記事やアンケートを読んでさらに涙したという。

一九二〇年代の村の生活が甦り今に訴えるものがある。スケールの大きい郷土史・文化財の財産が増え地域へいつまでも残るであろう。スタッフ及び参加者の皆さんには感謝の気持ちで一杯である。

子の綴り「なみだ」の舞台春温し



一〇年

一・一・四 「木村文助研究」通信No.22発行

一・一・一 合唱劇「村に咲く花」継続宣伝・北海道新聞

一・一・三 北斗市教育広報「きらめき」⑱号連載『赤い鳥』
に載った郷土の作文「祖母（推奨）高二北島千代」

一一年

一・一・二 伊達市木村祥男氏より金一封いただく。

一・一・二 北斗市教育広報「きらめき」⑲号連載『赤い鳥』に
載った郷土の作文「大工さん（推奨）高二吉村きみ」

一・三〇〇三 一 展示会準備

一・三〇〇 合唱劇 本番の通しげいこ・函館新聞

一・一・七 展示会「綴り方指導者 木村文助の業績」・北斗市
総合文化センター

一・二・二 「木村氏の功績知って 児童の綴り方作品展示」・北
海道新聞

一・二・六 合唱劇「村に咲く花」公演・北斗市総合文化センター

一・二・七 「村に咲く花」1000人魅了・北海道新聞

一・二・七 「市民熱演 観客1000人感動」・函館新聞

一・二・八 「木村文助の情熱 市民一丸で熱演」・函館新聞

一・三・三 「合唱劇協賛展示会成功」「市民の熱演に感動」・
報・ぶんぼけん

報・ぶんぼけん

四・一 北斗市教育広報「きらめき」⑳号連載『赤い鳥』に載
った郷土の作文「支那人の手工品（推奨）高二池田いね」

道文化情報へ投稿

10/5/1 「木村文助綴り方が合唱劇に」
通信員・木下寿実夫

10/11/1 「綴り方を合唱劇に」
音楽会実行委員会事務局長・前田治

11/5/1 「北斗市に甦った綴り方の世界」
音楽会実行委員会事務局長・前田治

合唱劇スタッフ及び出演者♪

脚本・作詞／中村勝雄 作曲／萩 京子

構成／萩 京子、中村勝雄

指揮／村上正幸

ピアノ／小寺奏子

バイオリン／渡辺拓也

フルート／佐藤知歩

出演；大野小、谷川小、浜分小各児童
大野中、上磯高、大野農高各生徒
大野女声合唱団カリンコール
女声コーラス・フロレス
函館どっくうたう会
北斗市民有志 ほか



連載 『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方(作文)や絵を投

祖母(推奨)

大野小高二北島千代

或朝のこと、祖母が起きないので行ってみると、顔がはれて頬が下がって(たるんで)いるので、走って来て父に教えたら、「それは大変だ。早く医者に診てもらわなくては」と言っていて、医者に来てもらいますと、「は、今はやりの腎臓病です。だ、いぶはれていますな」と言った父が「何を食わしたらよいでしょうか」と聞くと、「ええ、おもゆ(重湯)とソップ(スープ)の外は飲ませられませんな」と言

つて帰りました。次の朝になると病気は次第に重くなつていくばかりで手足までもはれてくるのです。頭も悪くなつて、つじつまの合わないことを言つようになつてしまつたのです。

て、いろいろ若い時のことを話して「何年ぶりでしたかね」などと笑つて、帰ろうとした時、父が「提灯持つて来て、千代」と言つたので、座敷にさがしに廊下まで行つたら、何だか泣き声のような、またうなり声のようなのが聞こえるので、黙つて聞いてると、だんだん高きはつきり聞こえてくるので、走つて来て「大変だ！お祖母さん、死ぬところだ」と言つたら、皆走つて来た。見るとお祖母さんは本堂の方に向いて、手を合わせて、一生けんめいになつて泣いているのです。母が「お祖母さん、何して(どうして)泣いたり、布団ひっぱつたり、手合わせたりして泣いているの」と聞くと「それだつて、せつかくおまんま(ご飯)できたから、食べらせようと思つて、『千代、食べれ、鬼子夫、食べれ』と、何ほ呼ばつたつて(いくら呼んでも)、返

事もしね。人は(を)馬鹿にしやがつて、ろくな目にあわね。今さら何の罰だか、本堂に川でもあつたら(入つて)死んでしまふ気になつたけれど、ようやくがまんしていたんだ」と言つて泣いている。母が「お祖母さん、あんまり心配すれば死んでしまふよ」と言つと、「それだつて何ほ何だつて、あんまり人は馬鹿にするもんだもの」と、なお泣くので、皆「困つたもんだなあ」と言つて帰つてしまつた。私はあとに一人残つて「お祖母さん泣くな、お祖母さん泣けば私も泣かさつて(泣けて)くるから、あんまり心配すれば脳悪く(頭がおかしく)なつて死んでしまふよ。死んだら私どうする。お祖母さん死んだら、頼りにする人なくなるんだよ」と慰めた

ら、ようやく泣きやめて「千代本堂にいい子だ。お祖母さんを面倒見てくれるし、寝ているとどこか悪くね(ないか)と聞くし、本堂にお祖母さん死んだら、命日におまんま上げてくれ」と言つて私の手をとり、ぎゅちり(強く)握つて、涙を手の上にばた(はた)と落とすのでした。それからずんずん病気は進んでいくばかりです。或晩、夜中に、蚊帳の外にばつたりばつたりという音がかすかに聞こえるので、頭を上げて見たが、暗くて何も見えない。母をゆり起して耳に口をあてて、「母ちゃんさつきね、何だかばつたりばつたりと音するもんだ。泥棒でね(泥棒じゃないだろうか)？」と言つと、母が蚊帳をまくつて見ていたのだが、「千代、大変だ。電氣をつけると、座敷の隅までばつと明るくなつた。見ると祖母は着物を背負つて前掛(まへかけ)を手にぐりぐりまいて、隅に座つている。母が「お祖母さん、何しているの」と聞くと、「はい、私ね、この頃病氣してから立てば、ばたり、立てばたりと転ぶのですつて」と言つと、母が笑いながら「お祖母さん、そんなにいい言葉使わなくてもいいから、まず床さつて寝(な)さい」と言つと、「はいはい、ずい分ひどい奥さんですね。隣まで遊びに行つてこようと思うのに、本堂にひどい」と言いながら、床に入つて寝ました。

次の日、行つてみると、顔のはれがひけていたが、だんだん治つてきて、今では自分の食べるものなどを自分でこしらえて食べております。私が「お祖母さん、もうろく(うろ)いたの(おかしく)かつたの(覚えて)いる？」と聞くと、「何も知らない」と言うので、泣いた時のありさまを教えると、笑いながら「本堂にそんなこと言つてあつたべか(言つただらうか)？」と言いました。(昭和二年四月号)

■ことばの意味

【本堂】お寺の本尊を安置している部屋。北島家はお寺。

【蚊帳】蚊や害虫を防ぐため、四隅をつつて寝床を覆う寝具。

綴方選評(抜粋)

鈴木三重吉

北島千代さんの「祖母」は深味のある作である。千代さんが「おばあさんが泣くと、私も泣かされてくる」と慰めるころや、おばあさんが死んだあとのことを頼み、手を握つて涙をこぼすあたりでは、だれでもほろりとなつてくるであろう。おばあさんが夜中に出かけようとしたり、お母さんに皮肉を言つたりする一種の狂態には、老年の人に通じた孤独感がにじみ出ていて哀れである。病気が治つて、食べ物を自分でこしらえて食べているところにも、年寄りの性格が出ていて悲哀である。

(編集・教育課八木橋直弘)

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。

大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方(作文)や絵を投稿し次々と入選、「日本一の綴方学校」といわれました。

大工さん(推奨)

大野小高二吉村きみ

私の家の近所に、若いとき大工をしたから今でも大工さんと呼ばれている、おかしな人があります(います)。去年のこと、私が水汲みに行くと、井戸にとよ子がいて、米ときをしながら生米を食べているので、「とよ子、生米甘いか」と聞くと、のん気そうに側の丸太に腰を下ろして煙草をぶかぶかやっていた大工さんが、「あんまり生米食べ(食)べると、体さ悪いんだえ」と言いながら、きせるを丸太に打っていた。すると、とよ子が「なしてげ(どうしてか)と聞く」と、「人間が皆煮て食うものを、生でがりがり食うんだもの、胃などに入ってから消化しにくいから、かえって害になるで」と言ったので、今まで少し足りない人とはかり思っていたのが

こんなことを言ったので、ずい分大工さん出来物(できた人)だと思つて「大工さん、何年生まで学校上がったの」と聞くと、「半年生まで上がったべかな(ろ)うかな。ほだほだ(そう)だそう(だ、な)も(なん)にも(も)上がらなかつた」と首をかしげて言つた。私どもが笑うと、気にもかけないで、今ごろ、おれ家の娘、どうしてらべな(どう)している(だ)らうな」と、また言い出したので、遅くなるのも忘れて、また「大工さんに何人くらい娘がいるの」と聞いたたら、「北海道に一人いるし、内地(本州)に二人ばかりいる。みんなおらに似て、いい女(お)ばかりだ」と、さも感心したように、私たちを見上げて言つた。また少したつてから「おらだつて若い時だけ、村でも一番いい男で、評判ものであつたども(けれど)、今(だ)たら(だ)つたり(人)に使われているか

ら、ハイカラもされない(する)ことができない)から、下がつて二番くらいだべな(だ)らうな」と言つたので、そつと、とよ子に「この大工さん、少しえらいこと言つてみたり、半可臭い(は)からしい)こと言うんだね」と言つと、くすくす笑つていた。しばらくたつてから立ち上がった大工さんの歩き方がおかしいので、「なして(どう)して(大工)さんの歩き方、おかしいんだね」と聞くと、「四、五年前から腰を悪くしてから、少しだけおかしくなつたんだ」と、腰の辺りをさすつていた。とよ子が「いんでも(道理)で歩き方、悪いと思つたもの」と言つと、「おや、そんなに指に見られるだけわりべが(悪い)だるうか」と言いながら、牛小屋の方に行つたので、私どもも家に帰つた。

それから二、三日過ぎに、私はいつにもなく、朝早く水汲みに行くと、大工さんが頭をタオルでぎつすり(ぎつ)ちり(結)んで半てんを着て、赤い脚絆に草鞋をはいて、大きな箱に腰を下ろして、ぼろぼろ涙をこぼしていた。私は「大工さん、何したの(どう)したの)と聞くと、「内地の娘(こ)、火事に焼けたつて電報来て、早く来てくれ(た)つて来た(た)つて、おれ(は)は(げ)げ、ぜんこ(お金)もないもんだ」と言つて、今度は箱のまわりをぐるぐる回りながら、「困つた、困つた」と言つて歩いていく。私は気でも狂つたのではないかと思うと、恐ろしくなつて、バケツに水を三分の一も汲まないで、走つて家に来ると、母は「なして朝から騒いで歩つてるんだね」と言つて叱つたので、「したつて(だ)つて」と、わけを言つと、「何、夢でも見て、そうして(る)んだべさ」と言つた。

学校に行く時、どうしたらうと思つて見たら、いつもの通りの風で、水を汲んで行く姿が、馬屋の方に見えた。それから或日、父が大工さんに「大工さん、年なんぼ(た)ね」と聞いたたら、「湯こさ(ふる)に」入つて数えてみたら、六十であつた」と言つたので、父が「ずい分若い」と言つたら、「したら(それ)なら、今(だ)度、誰か聞いたら四十だとい(かな)う」と言つたそうです。(昭和二年五月号)

綴方選評(抜粋)

鈴木三重吉

大野校の吉村きみさんの「大工さん」は、年級も年級だけれど、叙写には一番多く陰影があつて、写象が多角的に、味わい深く躍出しています。半ば、ふぬけたような魔残な(おち)ぶれた)あの大工さんの宿命の哀れさが、子供らしい或ユーモア的な表出の中にしみじみと出ています。半てんを着て赤い脚絆に草鞋をはき、頭をギョツとタオルで結んで、大きな箱に腰をかかけて、涙をぼろぼろこぼしていったところでは、その脚絆の赤い色そのものさえ、涙つぽく悲哀的です。人間の記録の一つとして、深い意味をもつた作編です。(編集・教育課八木橋直弘)

連載 『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初め、童謡作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介し、大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方(つづか)を綴りかたを授け、投稿し次々と入選、「日本一の綴方学校」といわれました。

支那人の手品(推挙) 大野小高二池田いね

お昼の御飯(ごはん)を食べて、妹と大市場の前まで来ると、わいわいと人のはしゃぐ声がある。妹は「いねちゃん、何だのあれ、ずいぶん騒ぐね。何かあるんだか(あるのかも)知らないよ」と言いながら、裏の方へ走って行った。私も妹のあとから走って行ってみると、沢山の人が円くなって、しきりに、はやしながら見ていた。

私も、人垣(ひとがき)の後ろから、伸び上がったが、妹をだいたりして見たが、妹は「いねちゃん、何も見えねや。あの木の上に上がらからね、いねちゃんも来なさいな」と言いながら、走って丸太の沢山積んである上に上がった。そして「見える見える」と言っていて喜んでいるので、私も上がろうとしたとき、今まで静かに見ていた見物人が急にわいわい騒いで、「うまいうまい、もう一回何かやってみれ」と大きな声で叫ぶ人もあった。上がってみると、なるほど、すっかり見える。

年頃(としがら)二十五、六で、せいの高い支那人で髪をぼうぼうさせ、顔の色は青黒く、白か黒か分からないくらいになった短い上服に、長いだぶだぶのズボンをはき、何かしゃべっているのか、口を動かしていた。そして前(まへ)にあつた大きな袋から赤い風(かぜ)のようなものを二つ出すと、二尺(ふたせ)ぐらいはなして両方に置き、それを走らせたり、お手玉のように、一つ上げては代わりを取り、代わりを取ってはまた上げている。そのたびに、何か言っているのだから、私は何を言っているのだろうと思つて、



風景 大野小高五釜澤みつ (昭和2年3月号)

丸太から下りて、人をおしのけ肘の下をくぐって、ようやく前に出た。支那人は「日本手品支那手品ちがう。らんだん、らんだん」と言つて、今度は前の袋からまた小さい袋を出して、その口をあけ、「みなさん、これ何思う。あてるよろしい」と言つと、後ろの方で「鼠だ」と叫んだ。支那人は「それちがう。鼠もつない。これなにかあてなひ? よろしい、これ蛇。日本蛇」と言いながら袋の口を開くと、大きい鎌首(かまがしら)を上げて火のような舌をペロペロ出した。三尺(さんせき)くらいの蛇がよるよる出て来た。支那人はそれをつかんで、体中に巻きつけ、「これ、蛇、もう少し巻くよろしい」と言いながら、今度はそれを取り、手の平にのせて、「かわいい蛇(へび)公、今度手品やる。しっかりとのことある」と言つて、水を口いっぱいに入れ、蛇に霧をふきかけて、口の中へだんだんと吞んでいった。はらはらして見ていると、蛇の頭は火のように舌をペロペロ出しながら、鼻から出て来た。支那人は涙をぼろぼろこぼし、片方の鼻から鼻水をたらしている。それでも前(まへ)にあつた盆をとって、「ううっ」とうなりながら、見物人の方に出すと、盆の中に銭(ぜに)お金をなげる人が多かった。支那人はそれを財布の中に入れてみると、私の横で見ている人が「蛇、口から鼻(はな)を入れて苦しくないでしようか」と話している、聞こえたこととみえて、「これ商(あ)ばい(仕事)、苦しいことない」と言いながら、その袋を背負つて海岸町(函館市)の方へ行つた。

私は蛇を口から鼻へ出した支那人が、涙をぼろぼろ出しているのを思い出すと、帰つても御飯(ごはん)を食べる勇氣(いき)がなかった。

【ことばの意味】 (昭和二年七月号)

【支那人】 中国人。支那は外国人の中国に対する古い呼び名。日本では江戸中期以後、第二次大戦(第二次世界大戦)まで称した。

【大市場】 当時、函館市の十字街(十字街)付近にあった大設(おほし)市場(いちば)か。

【一尺】 尺(しゃく)は尺貫法(しゃくくわんぽう)の長さの単位。一尺は約三十・三センチ。

【蛇】 クサリヘビ科の毒蛇。日本やアジア全域に分布し、灰褐色(はいせきしやく)に銭形(ぜにがた)の斑紋(はんもん)がある。頭部(あたま)が三角形で、敵(あだ)が近づくと毒牙(どくば)を立てて飛びかかる。

綴方(つづか)選評 鈴木三重吉

池田さんの「支那人の手品」は、すべてをはきはきとよく写した写実的(しょうじつてき)な秀作(しゅうさく)です。口から蛇(へび)をのんで、涙(なみだ)や水(みづ)ばなをたらしながら鼻(はな)から出して、お金をもらい、「これ商(あ)ばい、苦しいことない」と、平気(へいせい)で袋(ふくろ)をしょつていくところなどは、支那人(しなじん)の風貌(ふうぼう)がいかによく出ていて、いたましくも滑稽(こぼけ)です。

《北斗市郷土資料館内》

北斗市郷土資料館(旧大野町郷土資料室)
041-1201
北海道北斗市本町2丁目12番7号
TEL (0138) 77-6681
開 覧 9:00~16:00
休 館 年末・年始、臨時

『1920年代(大正から昭和初期)の田舎の生活・文化がリアルに表現・都会の先生が読む子どもたちは声も出なかつたという』
「林芙美子作短編小説に引用」、「ラジオ放送に引用」、「北海道教育史に掲載」、「短編小説的と評価された」など多数の綴り方を収蔵!

生活綴り方のふるさとを訪ねてみよう!

(「赤い鳥」復刻版全巻、木村文助編著書、写真など多数)

- 函館方面→車で、国道227号を通り大野市街地へ入る
- 道北方面→車で、国道5号の大沼トンネルを抜け、10分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み5分で着く

発行・大野文化財保護研究会
(略称:文保研・ぶんぼけん)
会長:木下寿実夫
○四一―一二〇一
北斗市本町3丁目11番32号
(0138) 77・8535



大野地区市街地の大野小学校門を入り右側木造の建物